

刊行にあたって

ミュージアムの調査・研究活動と 『立命館平和研究』の役割

安齋育郎 (立命館大学国際平和ミュージアム館長)

1992年に開設された国際平和ミュージアムは、それから10年目の節目の年からリニューアルの方向性について全学的な合意形成に努め、2005年4月に改装工事を一応完成させた。DVD付きの図録も新たに刊行し、日本語・英語・中国語・朝鮮語によるガイド作りも進め、それなりの好評を得ているが、この種の事業は何かを仕上げて満足し、そのまま放っておいたのでは、直ぐに内容が陳腐化し、魅力を失い、尻すぼみになりがちである。手持ちの膨大な収蔵資料についての調査・研究活動を進めて新たな知見の開拓に努め、それを常設展、企画展、特別展などに活かす不断の努力を積まなければならない。平和ミュージアムが刊行するこの『立命館平和研究』は、そのような調査・研究活動の発表の場としての機能を果たすべきものでもある。

今号は、淡路島に開設されていた「財団法人 若人の広場」から2004年12月に当ミュージアムに寄贈された膨大な資料についての整理から生み出された成果を中心に編集された。戦争と若人の関わりという意味では、周知のように、当ミュージアムのエントランス・ホールに「わだつみ像」があり、2階の「平和創造展示室」の奥には「無言館／京都館 いのちの画室 (アトリエ)」がある。

前者は、戦没学生の嘆きと怒りと悶えを表現した本郷新氏の作になる男子裸像であり、1953年に立命館大学に迎え入れてから、12月8日を中心に毎年「不戦のつどい」という名の像前集会が開かれてきた。この像は、「平和と民主主義」という立命館学園の教学理念の象徴であり続けてきた。

一方、「無言館／京都館 いのちの画室 (アトリエ)」は長野県上田市にある「無言館」の京都アネックスとでも言うべき施設で、戦没画学生の遺作と遺品を展示している。芸術を自己表現の手段として追求していた若い画学生が、その思いを果たせぬままに戦地に散っていった悲しむべき物語がその背後にある。

これらはともに戦争によって自己実現を阻まれた青年たちの無念の声を象徴するものであるが、「財団法人 若人の広場」から受け継いだ1000点近い遺品の中には、13歳から20歳までの若い学徒たちの遺品が数多く含まれている。2005年12月1日～16日、これらの若い生徒たちの学徒動員生活に光を当て、無念の「死」に先立って彼らが体験することを余儀なくされた「生きざま」を描く特別展を開催した。立命館大学国際平和ミュージアム リニューアル記念・戦後60年企画「ぼくたちわたしたちの生きた証—『若人の広場』旧蔵・戦没動員学徒遺品展」と題したこの特別展の開催に漕ぎ着けるには、遺品一つ一つの確認・整理作業に加えて、遺品の背後にある戦没学徒の勤労生活や日常生活を克明に描き出す苦勞の多い活動があった。その成果の一部は、同特別展の図録(2005年12月1日発行、A4版123頁)として刊行されたが、本紀要には、そうした作業の過程で図録に掲載できなかった資料を収録した。平和ミュージアムの地道な調査活動の記録として、その価値は小さくないものと確信している。

ところで、平和ミュージアムは物や写真や解説パネルを展示し、来館者を待ち受ける「クモの巣」型の運営ではまったく不十分であることはしばしば指摘されてきた。本号では、ミュージアムのリニューアルに協力した歴史研究者の福島在行氏が、吉田憲司氏が提起する「フォーラム型」のミュージアム運営の可能性について検討した論文を収録してある。ミュージアムが一方的に設けた展示を来館者が「見に行く」というのではなく、展示する側、展示される側、それを見る側の3者間のinteractiveなフォーラムという営みを通じて、ミュージアム機能の新たな質的展開が展望できないかという問題であるが、福島論文はその可能性と課題について問題提起的に検討している。平和ミュージアムが発行する『立命館平和研究』に相応しい論文と言うべきであろう。

ミュージアムは、今後とも調査・研究活動を強化し、名実ともに内外の平和博物館運動に貢献の出来る理論的成果を蓄積したいと考えている。その意味において、平和博物館運動の発展に資する積極的提言や大胆な理論的提起が寄せられることを期待したい。